

# fC面白ゼミナール

連載●10  
[今月の講師]  
遠藤一佳  
Kazuyoshi Endo

## 特殊なイメージ

私はあることをきっかけに、ほとんど先入観のない状態でこの業界に入った。エアロビックスダンス、ボディビルディング、スイミングなどについてもほとんど何も知らなかった。そんな理由で、現在においてもこの業界がやっていることには疑問に思うことが多い。

例えば、エアロビックス選手権、筋肉マン、日焼け大好きインストラクター、レオタード、若者の場所……。国民の多くが連想するであろうこれらのフィットネスクラブに対するイメージは一般社会から見たとき「特殊なイメージ」に確実に変形してしまっている。それが人々のフィットネスクラブ入会の妨げに働いているように思えるのである。

また私の知っている限りでは、多くのインストラクターはレベルが低すぎる。一般常識に欠けるし、専門的な学歴の背景も希薄、業界に入った動機も軽くて幼稚。このような人々が業界中にたくさんいるから業界発展が加速しないわけだ。

## このままだと、 ダメになる産業

◆ 昨今、業界では「この産業は高齢化社会の進展等で21世紀に向けた産業だ」という意見をよく聞くが、私はその認識はあまりにも無邪気すぎると思う。

その理由は、国民の健康意識(自主的運動参加意識の意)がもともと低い、社会保険制度が(今のところ)整備されておき病気になることも安心、国民は不健康でも仕事は出来ると思っている、などといった「潜在因子」が根付いているという点ももちろんある。もともと今後はこの「潜在因子」に社会保険制度の破綻、厚生年金受給資格年齢の引き上げなどといった「有利因子」が働き掛け、今まで以上に「自分の健康は自分で管理する」という努力や意識が高まり参加意識向上に役立つかもしれない。だが、さらに大きな理由は業界が未だに「昔前の流行・ファッション感覚や若者の場所」といったイメージを引きずった進歩のない、かつごく一部の人が楽しめないピンボケサービスを展開し、ソフト欠落をほったらかしにしているところにある。

つまり、先述の「潜在因子」の存在を揺るがす「有利因子」があるにもかかわらず、それに対する十分な受け皿となるべきソフトが問題外に欠落しているのである。

◆ フィットネスクラブが今のままのサービスをこれからも続ける限り、高齢化社会が進展すればするほどフィットネス

## フィットネス

# 新時代の迎え方



クラブ参加可能人口(パイ)は参加できない高齢者増と参加できる若年層減の2極面から減る一方になる。パイが減れば当然フィットネスクラブへの参加率は減ることになる。つまり、パイの減少と参加率の減少という2大パンチを浴びることになるのである。

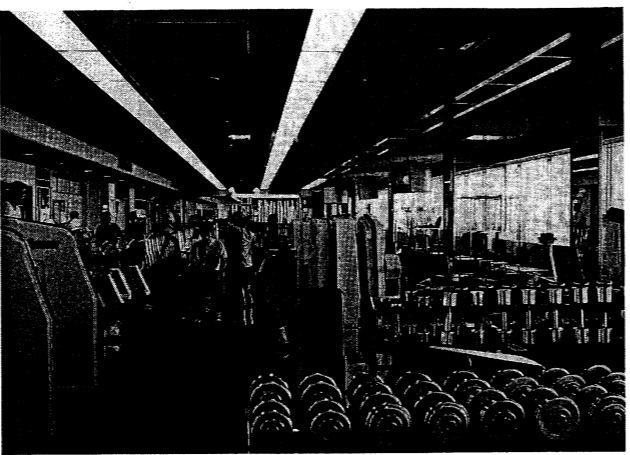
また、高齢化社会は「業界の追い風」といわれるが、その時、経済状態が「追い風」である保証はない。昨今の円高圧力による産業弱体化、逆に規制に守られた競争力のない産業のみの国内残留、人口増大に対する食料危機など……。別に悲観視するわけではないが今後はこれらのことを総合的に視野にいれて国民の生活に「がちり食い込んでいかないとこの産業もとんでもないことになるのだ」。

◆ 高齢化社会になって確実に需要が拡大するのは福祉産業であって、この業界はこのままだとこれまで以上に厳しい現実が待っているかもしれないのだ。

## 21世紀型 フィットネス思考

◆ フィットネスクラブというのは全国に1800施設あると聞くが、その結果国民の健康度が向上した、国民医療費が

正しい知識を伝える社会的貢献を



減ったなどという社会貢献話はまず聞いたことがない。向上(?)したのはエアロビックスダンスインストラクターやボディビルダーがお笑い番組のピエロにされる回数くらいのものであろう。成人病や国民医療費は増加の一途、国民の70%が、がん、心疾患、脳血管障害、肺炎等で死亡しているのが現状である。

◆ そんな中でフィットネスクラブは地域社会に何をすべきか、どうすれば参加人口を高めることができるかを真っ真に考える必要がある。

◆ 例えば、国民の多くは動脈硬化が何であるか、体脂肪率という概念は何か、肥満にはどのような種類があるか、誤った

◆ ダイエットとは何か、などなどについてほとんど正しい知識を持ち合わせていない。考えてみれば学校教育で成人病等について習ったことなどないのだから当たり前である。

◆ だからこそ健康管理に関する基本的な助言を行ったりしながら国民の健康管理のバックアップを効果的に行なう機関にニーズが生まれるのである。こうした点にこそ今後の(日本における本来の)フィットネスクラブの中心的役割があるのではないか。

◆ だからこそ、今後のフィットネスクラブは、フィットネスクラブに行けば男女各層を問わない全ての人が健康になれるのだという「フィットネスクラブ健康づくり」のイメージづくりと、それを實現できる活動の徹底に尽力すべきであろう。

◆ そのための基本的活動指針に私はまず次の2点を提案したい。

● 接遇面の教育を「超」重視し、明るく謙虚で礼儀正しいイメージをつくる。

● 従来の思考やイメージから脱し、予防医学的見地から健康科学を追求する。最終的にはエクササイズを切り口にした各人の健康管理能力向上への貢献を目指す。根拠もなく「フィットネスは健康にいい」といつてみたり、「楽しいフィットネス」などと十人十色の価値観に訴えたりするのは、本質が空洞化するだけだからほどほどにする。

◆ この指針を實行、実現していくには幹部、インストラクターともに(もちろん私も含め)人材登用の基準を今より相当厳しく規定する必要がある。その案についてはここでは触れないが、人材難も大きな業界悪であるわけだ。

## 業界発展には自己批判と 基本の見直しから

◆ これらのことから、21世紀へ向けて本当にこの業界をよくしようと思つたら従来の路線の延長や微調整では無理である。私は業界がまずすべきことは自己批判からであると思つている。

◆ 例えば、「月々の退会率3%」優良クラブ伝説「低質インストラクター」「不勉強幹部」「一部の無能コンサルタント」「既得権団体」「ブーム主義」等といったものは直ちに批判されなければならない。これらのものが相乗効果をつくって業界の村意識や内向き志向を強化し発展を阻害しているのである。

◆ 業界は発展できると思っているからこそ、わけのわからないものについては直接指摘していかないと当人たちの井の中の蛙ぶりは一向に改善していかないのである。

◆ これらの要素を完全に消した上で本当の意味での国民の健康志向というニーズを見直しゼロからクラブづくりをやり直す。それがフィットネス新時代の正しい迎え方ではないだろうか。



えんどう かずよし ●1964年東京都出身、日本大学文学部卒。勤三養和会系職労スポーツセンターを経て、小田急電鉄に入社。現在、小田急エクスプレス・アシスタントマネージャー。